

沖縄県青年海外協力隊を支援する会会報

第11号

〒901-2552 沖縄県浦添市前田1143-1
国際協力機構沖縄国際センター内
tel 098-876-6000 fax 098-876-6014
沖縄県青年海外協力隊を支援する会
発行責任者：事務局長 東江賢次

はいむるぶし

(沖縄八重山地方の方言で南十字星の意 題字：故末次一郎氏)

地球市民の輪を広げよう

ゆいまーる、沖縄からの試み

開発教育全国集会沖縄大会に

一三三〇名が参加

一月二八日にJICA沖縄国際センター(浦添市)において開発教育全国集会沖縄大会が開催されました。

「地球市民」を育てることを開発教育と呼んでいます。第一四回目となるこの全国集会は、沖縄県青年海外協力隊を支援する会と(社)協力隊を育てる会が主催し、「地球市民の輪を広げよう」ユイマール、沖縄からの試みをテーマに一三三〇名が参加して行われました。県外からは、東京や茨城、北海道など二〇県から五六名の参加がありました、名実ともに全国集会にふさわしいものでした。

二一世紀の社会は、人口、貧困、環境問題などグローバルな課題に取り組みることが最大の課題です。そのために開発途上国など他の国の文化や人々の生活を理解することが求められています。

(社)協力隊を育てる会と各県の協力隊支援組織は協同で、青年海外協力隊の体



全体集会 (開会式)

験を国内の国際理解・協力を活かす活動のひとつとして開発教育全国集会を始めました。

午前九時二〇分から始まった全体集会に続いて、桜井国俊氏(沖縄大学学長)が「軍隊を捨てた国 コスタリカに見る平和教育」をテーマで基調講演をしました。

続いて、稲垣純一氏(KBC学園・国際電子ビジネス専門学校校長)をコーディネーターに、

桜井国俊氏(沖縄大学学長)、五月女光弘氏(外務省参与、NGO大使)、仲間あずみ氏(沖縄県青年海外協力協会会長)をパネリストに迎え「地球市民として生きるために」次世代へのメッセージ」をテーマにパネルセッションを行いました。

午後からは、五つの分科会(①移民 ②教育 ③福祉 ④ シニア国際協力 ⑤フェアトレード)に分かれて、ワークショップ形式で学習をしました。

翌二九日は、今大会で初の試みとなったスタディツアーが二コース①沖縄文化 ②沖縄平和 で実施され、合わせて四四名の参加があり、大変好評でした。

会場設営や当日の受付、進行など沖縄大会の開催にあたっては、沖縄県内に在住する多くの青年海外協力隊OBの協力がありました。



分科会の討議状況

はいむるぶし

昨年十一月に宮城清志沖縄県教育庁次長（現在 沖縄県立博物館長）らは、海外ボランティア活動現地調査のためバングラデッシュを訪問しました。その報告書を掲載します。

海外ボランティア活動現地調査報告

広い視野に立った人材育成

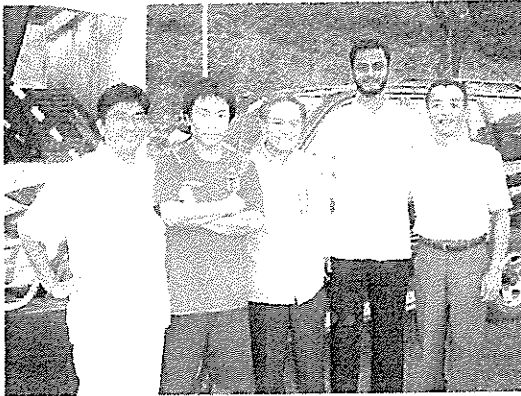
沖縄県教育庁次長 宮城清志

はじめに

バングラデッシュ国は、年5%台の経済成長率（九〇年から一〇年連続）が続いており、街の様子は、一〇年前に比べて一変しているとのこと。首都ダッカ市内では、車が道路を溢れる様に走っています。車列に少しでも隙間があれば、自動車やバス、二、三人乗りで緑色の三輪タクシー（CNG）、数多い力車（幌付きの三輪自転車）が競って割り込んできます。衝突しないかと気を揉む場面が幾度もあります。

市内の道路沿線では、いたるところで大型スーパーや建物が建築中です。ダッカは、人口密度が極めて高く、約一千万の人々が住んでおり、貧しい人々も多くられるが、経済成長とともに人々は希望に向かって懸命に暮らしている様子、街の息吹、熱気を感じさせます。走っている自動車はトヨタが多く、国際社会における相互依存関係の進展を実感しました。

この度は、発展途上国において青年海外協力隊派遣などの事業展開をして



左から、喜屋武浩司県教育庁指導主事、我如古盛修協力隊員、宮城清志県教育庁次長、見受けいて斎藤祐巳OIC次長（チッタゴンにて）

いるJICAの調査団に参加し、貴重な体験ができたことに対し、JICA沖縄国際センターをはじめ関係者の皆様から感謝の意を表します。

背景

沖縄の人々は、何時の時代も海外に目を向け諸国から多くの影響を受けて暮らして居ます。琉球王国時代は交易や外交を巧に行い平和を旨として隣国と付き合ってきました。

本県では、沖縄の風土と歴史の中で培われた「平和のこころ」を広く内外にのべ伝え、世界の恒久平和を願い、国籍や軍人、民間人の区別なく沖縄戦でなくなったすべての人々の氏名を刻んだ「平和の礎」を建設しました。そして平和の大切さと自他の生命の尊重、この普遍性を訴えています。また、県人の寛容のこころも象徴的に表し、これは世界に誇れる記念碑であります。

国際社会は、今後ますます相互依存が進展していきます。このことも踏まえて、沖縄振興の基本施策には、国際交流・協力拠点の形成を目指すとしております。そして、平成一四年度を初年次に平成二三年度を目標年度とする「沖縄県教育長期計画」においては国際化・情報化へ対応した多様な人材の育成を掲げています。併せて、本県の地理的条件や歴史的経験を生かし、異文化の理解や自国の文化を尊重する態度及び国際協調の精神等を教育の中で育み、国際交流拠点を担う広い視野に立った人材育成に努めることの必要性をうたっています。

青年海外協力隊員活動視察

ダッカで数名の隊員と面談した。

井上隊員は、私立高校の教員を辞めて隊員に応募したとのこと。彼は



小学校を訪問する宮城教育庁次長（中央）

はいむるぶし

「日本にいたときは、生徒に対して人間としてどう成長させるかについて深く考えながら教育をすることはなかった。バングラデシュで教育活動に携わったことにより、人間として幅が出てきた。利益と関係なく付き合い、貧しくてもしっかりと生きていく当地の人々を見て、人間とはこれなんだと気づいた。」と話しております。

滋賀隊員は、日本で日本語教師をしていたが、今はダツカ大学で日本語を教えています。彼は「自分の仕事がより好きになった。新鮮なことがたくさんある。教育の根幹に立ち返えることができた。日本において、現在は当たり前のように行われていることでも、ここまで創るために人々のいろいろな努力や苦労があつたんだということが理解できる。」と言っております。

本県出身である我如古隊員は、児童生徒や警察官、一般の人々にハンドボールの指導をしています。協力隊員を終えたら沖縄に帰り、教員を目指すとのこと。異国での貴重な経験を活かして、広い視野を持つたすばらしい教員になるものと思います。私達は、チッタゴンの市場で当地の人々から「ハイサイ」、「ハイサイ」と呼びかけられました。彼が挨拶としてそれを広めており、地域にうまく溶け込んで人々と仲良く暮らし、活動している様子が伺えます。イチャリバ兄弟の精神、違いを認める寛容な心を持つウチナーンチュの面目躍如の感がありました。

意義

発展途上国において、青年海外協力隊員として活動し支援をするとは、相互依存関係で成り立っている国際社会において我が国と被援助国双方にとって様々な意義があります。

何よりも、多くの外国の方々、献身的に任務を果たす隊員を通して、日本人や日本のことをより良く理解し、精神的連帯を築いていくことに繋がります。このことは極めて大切なことでもあります。

また、隊員の皆さんは、出会う様々な課題を一つひとつ乗り越えながら任務を果たしています。その中で海外の人々の風習や生活等を知るとともに日本のよさを一層理解していく契機になります。

そして、他の人との様にかかわるか、自分は何だろうか、我々は

何だろうか、人間とは何だろうかと改めて深く問いかけていきます。この様に国外でのボランティア体験を通して気づき学んだことは、隊員自身が、より良く生きていくために大いに役立つものであると思います。

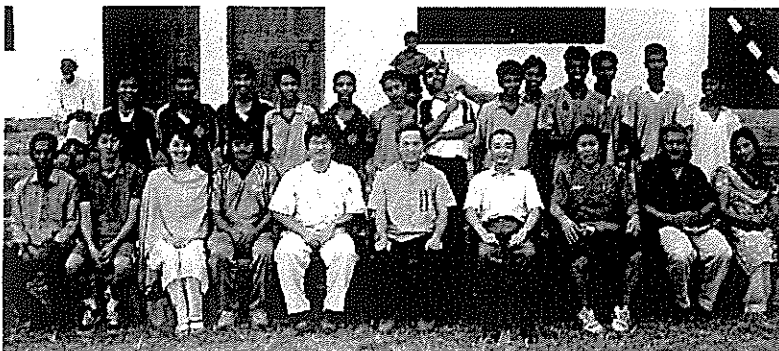
むすび

これからの世界は情報化や国際社会の形成が進み、相互依存がますます進展していきます。その中において平和を築いていく上でも、相互の風習と生活の理解と尊重、いわゆるお互いの違いや多様性を認め合うことが大切であります。

本県として、国際協調の精神等を育み、国際交流拠点を担う広い視野に立った人材育成に努めることは極めて大事なことであります。そのため、児童生徒に多大な影響を与える教職員のより良い国際理解が必要となってきます。その意味で、前述の青年海外協力隊を含め、教職員が国外において教育活動をする意義は大きいと言えます。また、やがては「団塊の世代」である教職員が退職を迎えます。その人々の退職後の活躍の場や生き甲斐の場として広く海外に目を向けた取り組みも必要になってくるものと考えております。

現在、国際理解教育や教職員の国外での研修の充実が本県教育の課題の一つとなつていくことから、教育施策としてこの課題解決に向けて具体化できたらと考えています。

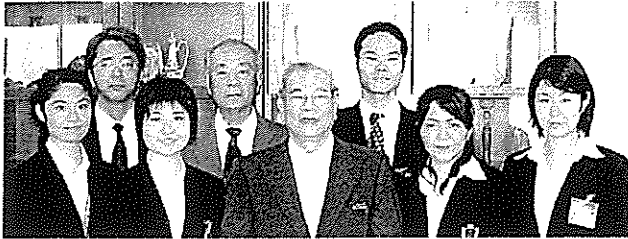
そして、県人のイチャリバ兄弟の精神や違いを認める寛容の心は、国外において活動するときに世界の人々の理解が得られ、大いに役立つものがあると考えます。



我如古隊員の指導するハンドボールチームのメンバーらと

はいむるぶし

行ってらっしゃい 出発ボランティア紹介



左から上原志乃、奥野英幸、小橋川みゆき、砂川忠雄、仲宗根沖繩県教育長、山城博史、城間奈美子、古謝麻耶子



新城智子 協力隊 フィリピン 家畜飼育 2006.6～2年間 那覇市
楽しく、前向きに。



石川清智 協力隊 バヌアツ 小学校教諭 2006.6～2年間 うるま市
協力が必要な人々のパートナーとしてお互いに成長していきたい。



福里あゆみ 協力隊 ニジェール 小学校教諭 2006.6～2年間 那覇市
限られた期間で、できること一つ一つ見つけてやっていきたい。



渡具知愛理 協力隊 バングラデシュ 環境教育 2006.6～2年間 読谷村
持ち前の元気と好奇心で、何事にも臆せず、積極的に取り組む。



豊里勝一 日シニアV ブラジル コミュニティ開発 2006.6～2年間 浦添市
日系移住地の農業、農協の成立・形成を知るとともにアマソンの農業振興を支援したい。

上原志乃 協力隊 ボリビア 青少年活動 2006.3～2年間 那覇市
すべてはお互いの学びや成長のために生じているという視点で活動する。

どんな困難も乗り越えるパワーと情熱、協調性で活動する。

小橋川みゆき 協力隊 メキシコ 助産師 2006.3～2年間 那覇市

山城博史 協力隊 ホンジュラス で電子機器 2006.3～2年間 南風原町
日本を知ってもらうこと、現地のために全力を尽くす。

人との出会いを大切に、周りを少しでも良い方向にしたい。

古謝麻耶子 協力隊 モザンビーク 音楽 2006.3～2年間 宮古島市
音楽を通して楽しい空間や時間をつくりたい。

奥野英幸 シニアV ブータン 電子行政 2006.3～2年間 那覇市
あせらず、あわてず、あきらめず、あなどらず。

城間奈美子 協力隊 マラウイ デザイン 2006.3～2年間 今帰仁村

砂川忠雄 シニアV サモア 技術科教育 2006.3～2年間 豊見城市
現地の人と協調して実りある2年間にしたい。

仲本聖子 日青V パラグアイ 団体事務 2004.1～2006.1 宜野湾市
沖繩を離れ、自分が根っからのウチナーンチュであることに気付かされた。

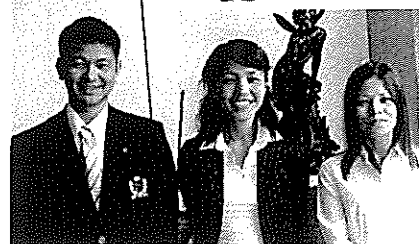


麻生直衡 日青V ボリビア 日本語教師 2004.1～2006.1 那覇市



南米日系社会と沖繩は切り離せない。表に出ることのない歴史を垣間見ること。今後は、アマゾン奥地で「埋もれた日系人社会」のために活動する。

お帰りなさい 帰国ボランティア紹介



左から、名嘉信祐、玉城歩、伊波智恵子

名嘉信祐 協力隊 キルギス共和国 青少年活動 2004.7～2006.3 宜野湾市

沖繩は人、車が多いことに改めて気づきました。「すみません」という言葉は、キルギスでは一度も聞いたことがありません。 県立森川養護学校に復職。

玉城歩 協力隊 コロンビア 写真 2004.4～2006.4 那覇市

すっかり「コロンビア人」になってしまいました。誰とでも友達みたいに話すところ、ゆっくりしゃべるところ、何でも楽しく思うところ。 アメリカ自然史博物館に復職。

伊波智恵子 シニアV カンボジア 保健師 2004.4～2006.4 恩納村

日本がいかに恵まれた環境にあるかということを実感しました。 恩納村役場に復職。